

## 2012年度第5回理事会(定例)開催

### ロンドン五輪の総括と今後の強化について



#### ●2012年度第5回理事会(定例)について

2012年10月30日(火)にJVA事務局会議室で開催された2012年度第5回理事会(定例)の概要をお知らせします。

#### <決議事項>

#### ●ロンドンオリンピックの総括と今後の強化について

森田淳悟強化事業本部本部長からロンドンオリンピックの総括と今後の選手強化に向けた対策が提案され、理事会は満場一致でこれを承認可決いたしました。

総括は全日本男子、全日本女子、ビーチ男子・女子にわけ主な事項を記載すると以下のとおりです。

##### 全日本男子

- ・北京オリンピック当時、最年少であった福澤、清水両選手がロンドンオリンピック世界最終予選のメンバーでも最年少であったことが表しているように、大学、ジュニアレベルの育成強化が進まなかった。

##### 全日本女子

- ・ロンドンオリンピック銅メダルを受け、諸施策をさらに強化する必要がある。

##### ビーチ男子・女子

- ・選手の人材及び育成不足とビーチ強化委員会の運営力不足。
- ・強化施策の見直しが必要である。

次に、今後の選手強化に向けた対策を同様に記載すると以下のとおりです。

##### 全日本男子

- ・強化の一貫性をしっかり検証する。
- ・ユース、ジュニアほか各レベルのチームに専門的指導者を付けること、及びこれらの指導者の交流を図る。
- ・強化委員長の職務の定義を明確にする。

##### 全日本女子

- ・ロンドンオリンピックの決勝戦と3位決定戦の試合内容の差を検証する。
- ・長身者の育成と個々の技術向上。(世界は2m級)
- ・文部科学省の委託事業であるマルチサポートの対象競技である現在の地位を確保する。

##### ビーチ男子・女子

- ・ビーチ強化委員会の充実。
- ・Vリーグ引退者のビーチ転向希望。(企業チームに依頼)
- ・強化合宿の充実。
- ・ポイント制のトライアル試合を多数組む。
- ・外国人指導者の招聘。

#### <報告事項>

#### ●眞鍋政義監督から全日本女子強化について

“ロンドンオリンピックまでの取り組みと今後の展望”として、次期監督就任が内定した眞鍋監督から理事会

に報告がありました。

なお、この報告は、オリンピックの全ての分析が終わっていないこと、次の4年間に向けてのコーチングスタッフが決定していないことなどから、私案という前提で報告されたものです。(事務局注:ここに掲載した内容は監督が執筆した報告書を抜粋したものです。)

{総評}

\* 2009年から4年間の強化について

・2009-2010年:世界選手権への挑戦

2009年は「世界を知る」というテーマを掲げ、2010年世界選手権でメダルを獲得するための下地を作りました。世界を転戦するなかでライバル国のデータを可能な限り蓄積・分析、分析結果をコーチ、選手とメダルを獲得するための具体的な戦術、技術的目標値、練習方法を議論しました。この結果、世界選手権の目標値が選手間で理解され、日々高いモチベーションをもって練習に取り組むことができました。その積み重ねが32年振りのメダル獲得につながったと思います。

・2011年:ワールドカップからロンドンオリンピック最終予選

ワールドカップはオリンピック出場権獲得を目標に挑みましたが、4位に終わり出場権を獲得できませんでした。しかし、世界ランキング1位、2位のブラジル、アメリカにストレートで勝利するという収穫もありました。さらに故障した選手に代わり新鍋、岩坂などの若手選手の台頭があり、確実に選手層が厚くなっていることを実感できました。オリンピック最終予選は予想以上の苦戦でしたが出場権を獲得することができました。

・2012年:ロンドンオリンピックで頂点を目指す

オリンピックでは最終目標であるメダルを獲得し、就任時に掲げた目標を達成することができました。オリンピックの表彰台に立つのは28年振りであります。オリンピック参加ボイコットがあった1980年代を考慮すると、全ての国が参加したオリンピックでは1976年以来(36年振り)のことであります。さらに、直近の世界3大会で全てベスト4入りしたのは日本(世界選手権3位、ワールドカップ4位、オリンピック3位)とアメリカだけです。このことは全日本女子が安定的に力を発揮していることの証明であると思います。身長の高い選手が絶対的に有利であるといわれる競技において、オリンピック参加12チームで最も平均身長が低い全日本女子が表彰台に立てたのは、選手、スタッフが一体となり、勝つための組織を作り、身体能力のハンディキャップを上回る技術で導き出した結果であると確信しています。



{リオデジャネイロでステージをあげるための方策}

・現状分析

現状の国内戦力を分析すると次世代を担うジュニア、ユースに190cmを超える大型選手は存在せず、リオまでにこれを克服するのは難しいと思います。現存の戦力と若い選手を融合させながら世界一のスキルとチームワークの構築を目指しチーム作りをすることが必要です。オリンピック翌年は各国とも世代交代を行う時期であり、全日本女子も同様に若手選手を積極的に代表チームに参加させ見極めていきたいと思います。次回の世界選手権では、若手選手に積極的にチャンスを与え、世界で戦うことの難しさを肌で感じさせたいと思っています。

・国際大会がない時期のコーチ海外派遣

ロンドンの成功の理由の一つとして海外遠征やコーチが海外のプロリーグなどを視察して情報を獲

得したことがあげられます。今後は、コーチが視察ではなく、シーズンオフは海外のプロリーグでコーチとして在籍し、今まで以上の情報収集をすることがリオでメダルを獲得するための一つの方策であると考えます。

・スポーツ科学に関する専門家の遠征帯同

スポーツ科学が進歩してパフォーマンスの向上に役立っています。今までに、スポーツ栄養学や心理学の専門家を招聘してきました。海外で勝つためには、栄養面やメンタル面での一層の強化が必要とされるため、アウェーの状況において必要な栄養学や心理学の知識を直接リアルタイムで選手が習得できる体制を作っていきたいと思います。

・世界一をキーワードにした取り組み

故松平名誉顧問が「世界一になるためには世界一を体験する必要がある」とおっしゃっていました。金メダルを目指すチームとして、バレーボールに限らず世界一と言われていることを体験・経験する機会を増やしていきたいと思います。

・ユース、ジュニア世代の強化

ライバル国に比べて身体的に劣る全日本女子が勝ち抜くためには、世界一のスキルを修得することです。大型選手に対して通用するスキルを修得するためには、長期間にわたる反復練習と実戦練習が間違いなく必要です。そのためには、ユース、ジュニアの時代からシニアで通用するスキルはどのようなものかという共通認識をもって強化、練習を行うことが肝要であると考えます。ユース、ジュニア期の指導は今後のバレー界の発展には、最も重要であることは周知の事実であります。つまり合宿以外の時もシニアのコーチやスタッフが継続的に指導できるシステム作りを構築する必要があると思います。

{最後に}

2009年からロンドンオリンピックまでの私なりの総括と今後の展望について述べさせていただきました。次のオリンピックに向けてロンドン以上の成績を残すためには、今まで以上にスタッフや関係者の協力が不可欠であります。私のコーチング哲学としては、選手やコーチが常に高いモチベーションをもってバレーボールに取り組むことができるようにすることだと考えております。そのためにも早急に体制を整えて選手、スタッフ、関係者が同じ目標、理念のもとに努力できるようにしたいと思います。

●第3期(2012年度)上半期の収支実績について

第3期の上半期終了時点におけるJVAの収支実績が岩満一臣事務局長より報告されました。

当期は、ロンドンオリンピック世界最終予選開催、ロンドンオリンピック本大会派遣に伴う諸費用などがあり、進捗率は収支とも前期を上回っております。

収入実績は、年間予算額 20億 5,395万円に対して 9億 1,400万円、進捗率 44.5%(前期実績は、31億 2,998万円、4億 8,572万円、15.5%)、支出実績は、年間予算額 20億 4,784万円に対して 8億 3,929万円、進捗率 40.9%(前期実績は、31億 3,009万円、6億 4,524万円、進捗率 20.6%)となりました。

詳細は別紙を添付いたしましたのでご一覧をお願いします。

●第3期(2012年度)第2四半期の業務執行理事職務執行報告について

中野会長をはじめ計9人の業務執行理事から、法令及び理事会運営規程第12条に基づき、第2四半期の職務執行報告がありました。

●第3期(2012年度)第2回功労者Ⅱ表彰について

加盟都道府県協会からの推薦を受け表彰委員会で審査を行い、以下の方々の表彰が決定したことが岩満表彰委員会委員長より報告されました。

石橋 洋 (千葉県バレーボール協会参与)      早川 祐之 (愛知県バレーボール協会副理事長)